

コーカンド・ハーン国のサリコル侵入事件における奕山の行動

<https://doi.org/10.5281/zenodo.15570547>

楊 曦晨 Yang Xi CHEN

筑波大学人文社会科学研究科国際日本研究専攻

博士後期課程

Abstract. In the 16th year of Daoguang reign (1836), Yishan, who was appointed as the Qing Ili Ministerial Attache (serving from 1835 to 1837), was ordered to respond to the Sariqol invasion incident by Khokand. Previous studies have examined the Qing Dynasty's response to the Sariqol invasion, but there has been insufficient analysis of Yishan's stance on the incident. Therefore, this article examines the Sariqol invasion incident by the Khokand Khanate that occurred in the 16th year of Daoguang reign (1836), and analyzes the response strategies proposed by Yishan, the Ili Ministerial Attache who was responsible for suppressing the incident. Through this analysis, this article aims to clarify the Qing Dynasty's stance toward Khokand by the governing authorities of Xinjiang in the 1830s. This article analyzes the negotiation process between Yishan and the Qing Emperor Daoguang during the Sariqol invasion incident by the Khokand Khanate, revealing that Yishan held differing views on the Qing Dynasty's policy toward Khokand. Yishan's argument differed from Emperor Daoguang's more passive defensive strategy. He analyzed the situation from economic and political perspectives and believed that military action should be taken to eliminate the threats to the Qing Dynasty's Xinjing region. The proposal of Yishan was not accepted by Emperor Daoguang, but it became clear that through strict measures, he enforced harsher trials and judgments regarding crimes in the "karun region" and resolved the Khokand invasion incident at Sariqol.

Keywords: Qing Dynasty and the Khanate of Khokand relation, Sariqol Invasion Incident, Yishan's Response Measures

要旨

道光16（1836）年、伊犁参贊大臣（在任1835年-1837年）に任命された奕山は、コーカンドによるサリコル¹侵入事件への対応を命じられた。今までの研究では、清朝側のサリコル侵入事件への対応について検討されてきたが、奕山がこの事件に対してどのような意見を持っていたかについては、十分に分析されていない。そこで本稿は、道光16（1836）年に発生したコーカンド・ハーン国によるサリコル侵入事件に着目し、当該事件の鎮圧にあたった伊犁参贊大臣奕山がどのような対応策を主張したのかを分析することで、1830年代における清朝の新疆統治層の対コーカンド姿勢を明らかにすることを試みる。本稿では、コーカンド・ハーン国が引き起こしたサリコル侵入事件における奕山と道光帝の交渉過程を分析し、彼が対コーカンド政策について異なる見解を持っていたことを明らかにした。奕山の主張は、道光帝の非積極的な方策とは異なり、彼は経済的・政治的な側面から分析し、清朝の新疆に対する脅威を取り除くために兵を出すべきであると考えた。奕山の提案は道光帝に認

¹ サリコルはヤルカンドの要地であり、カシミール、バダフシャンなどの外国商人が貿易するのに必ず通過するヤルカンドの要地である（小沼ほか 2013:16）。漢文の史料でサリコルは「色呼庫勒」、「色勒庫爾」「色勒庫勒」などに記入された。

められなかったが、彼は強硬な手段を取ることで「カ倫²内地域」における犯罪の審理や裁判を厳格に行い、コーカンドによるサイコロ侵入事件を解決した。

1.研究背景

コーカンド・ハーン国は 1830 年からヤルカンドの要地であるサリコルを経由するカシミールやバダフシャンなどの外国商人に対する課税権を得るため、軍事力を行使してサリコルへ侵攻し、パミール周辺地域の東方貿易を独占しようとした。1830 年代にコーカンド軍はサリコルへの侵入事件を繰り返し引き起こした。コーカンド軍のサリコルへの度重なる侵入に対して、清朝は主に対コーカンドとの交渉と現地ムスリムの自衛に依存して対応しており、それについて具体的な軍事命令が出されず、現地の官員も実質的な軍事行動を取らなかった（陳 2020:59-60）。道光 16（1836）年にコーカンド・ハーン軍は再びサリコルへ侵入した。この侵入事件では、コーカンドの兵力数が多く、サリコルに大きな損害を与えたため、清朝はそれ以前よりも事件の鎮圧に積極的に努めた。侵入事件を鎮圧するために、清朝側は伊犁参贊大臣であった奕山をヤルカンド派遣し、事件の平定を指揮させた。相次ぐ領土侵犯に直面した清朝は、1830 年代のコーカンドとの関係において、妥協的、消極的な政策が目立ったが、道光 17（1837）年に侵入事件が順調に解決されていき、その後にコーカンド軍が再びサリコルに侵入することはなかった。以上の内容を踏まえ、清朝がなぜ当該の事件を順調に解決できたのかを考察し、その上で奕山などの新疆統治層が事件中に提案した対応策について検討する必要がある。

2.先行研究

道光 16（1836）年のサリコル侵入事件については、佐口（1965:498-504）と潘（1991:150-152）の研究が侵入事件の経過を簡略的に言及しているものの、清朝側の具体的な対応策を詳細に考察していない。陳（2020）は、侵入事件に対する清朝側の対応策を分析したが、当該事件中の奕山の行動については、清朝側の対応を論じる中で道光帝の命令に従った奕山の対応について言及するとどまり、奕山などの新疆統治層が侵入事件に対して実際にどのような意見を持っていたかについて十分に検討していない。

3.研究目的

本稿は、奕山がコーカンドの侵入事件にどのように対応したかを検討することで、1830 年代における辺境の安定を維持するため、清朝の新疆統治層がコーカンド・ハーン国との関係を処理する際に示した姿勢を明らかにすることを目的とする。

4.史料

² 清朝は辺境を防備するために、カ倫（満洲語 karun）と呼ばれる辺境警備処を設けた。それは新疆においては例外的なホータンなどを除いて、各オアシスと清朝統治の及んでいない諸地域とを結ぶ路線上の要地に配された（堀 2022:34）。

本稿では、主に清朝側の史料（漢文史料）を使用する。すなわち道光帝の命令や指示を含む皇帝に関する記事を選録した『清実録（宣宗成皇帝実録）』（以下、『宣宗実録』と略す）、台湾の国立故宮博物院図書文献館所蔵の「宮中档」などの档案史料を利用した。本稿は奕山たちの上奏文を利用することで、侵入事件への対応中の清朝の新疆統治層の提案を分析する。

5. 研究内容

5.1 奕山と道光帝の交渉過程

道光 16 年 10 月 3 日（1836 年 11 月 11 日）、コーカンド・ハーン国のラシュカル・コシュベギは約 2000 人の兵を率いてサリコルに進攻した³。サリコルのハーキム・ベク庫爾察克（クルチャク）はムスリム軍を率いて激しく抵抗したが、力が及ばず、負傷して捕らえられ、サリコルもラシュカル・コシュベギに占領された。コーカンドの猛烈な攻撃に直面した道光帝は、直ちに奕山に次のような勅諭を下した⁴。その内容とは、サリコル城の防備を強化するために増援部隊を派遣するとともに、コーカンド・ハーン国に書簡を送り、侵入事件に関する交渉を試みるよう命じるものであった。清軍の防備について、道光帝はコーカンド軍との正面衝突が、最低でも相手が卡倫内に侵入し、騒動を引き起こした後に行うべきであるとし、卡倫に出てコーカンド軍を攻撃してはいけないと命令した。また、道光帝はサリコルへの侵入がラシュカル・コシュベギの独断であり、コーカンド・ハーン国の君主がその詳細を知らない可能性も考慮していた。

道光帝の命令を受けた奕山は、道光 16 年 12 月 15 日（1837 年 1 月 11 日）にイリから出発し、ほぼ一ヶ月後の道光 17 年 1 月 9 日（1837 年 2 月 17 日）にヤルカンドに到着した⁵。その後、奕山はラシュカル・コシュベギのサリコルへの侵入に対処し始めた。奕山は葉爾羌辦事大臣興徳（在任 1834-1837 年）が述べたコーカンド軍の行動を調査し、事実と完全に一致することを確認した。しかし、この時点でラシュカル・コシュベギはすでにコーカンド・ハーン国に戻っていた。コーカンド側はたった 200 人あまりが塔什霍罕（タシホルハン）の塔哈爾瑪（タハルマ）荘⁶に残り、クルグズ人と合流して回荘⁷で騒乱を起こしていた。奕山は道光帝の勅諭に従い、コーカンドに書簡を送り続けた⁸。同時期に、サリコルにおいて 14 カ所の回荘が頻繁にコーカンド軍に襲撃されており、ムスリムたちは恐れおののき、不

³ 『宣宗実録』巻 291、道光 16 年 11 月 16 日条。

⁴ 『宣宗実録』巻 291、道光 16 年 11 月 16 日条。

⁵ 台湾国立故宮博物院所蔵、宮中档奏摺（道光朝）「奏為遵旨馳赴葉爾羌傳示諭帖據實具奏」（奕山）道光 17 年 1 月 16 日、档案番号: 405000337。

⁶ 塔哈爾瑪荘は塔什霍罕の北の回荘であり、サリコルの要地である（佐口 1963:500）

⁷ 回荘はムスリムの村落を指す。

⁸ 台湾国立故宮博物院所蔵、宮中档奏摺（道光朝）「奏為遵旨馳赴葉爾羌傳示諭帖據實具奏」（奕山）道光 17 年 1 月 16 日、档案番号: 405000337。

安と食糧不足に苦しんでいた⁹。また、サリコルの住民はコーカンド軍の侵入や略奪に抵抗しようと努めたが、その騒乱を完全には鎮圧できなかった¹⁰。そこで、サリコルのベクたちは家族をカ倫内に避難し、清朝の保護を受けながら生活することを望み、清朝側に支援を求めた¹¹。サリコルのイシクアガ・ベク邁木熱（マイムレ）の請願を考慮した上で、奕山はサリコルに対する調査を行った。

【史料 1】奴才らが詳細にサリコルを調査したところ、乾隆年間に平定されて以降、当該の地にベクを設置し、「図記」（清朝の官印）を下賜し、今まで 70 年も領域内に属しています。管轄下の回荘 14 カ所は、毎年、定額の貢納金 27 両 7 銭を上納し、折納の布 2000 匹あまりを上納し、イリに運送して備えておきます。また、硝石 1700 斤を上納し、ヤルカンドの「中営」で受け取り、訓練や防備用の火薬の製造に用いられます。このように、当該地域の貢物や賦税は元々カ倫内の各回荘と何ら異なるところがなく、決してカ倫外の別の部落とは比較できる地方ではありません。（奕山たちの上奏文「奏聞葉爾羌所属卡外色呼庫勒地方被賊占據情形並会同籌画辦理緣由事」、道光 17 年 1 月 16 日）¹²

また、奕山たちは上奏文の中で、道光帝に現地の情勢について以下のように報告した。

【史料 2】現在、賊の動向を探ると、すでに各荘に行き騷乱を引き起こしており、まことに次第に蚕食が進み、当該の回戸¹³は力を尽くして抵抗し、耕作に支障をきたし、勢い必ず回賦の定額に足りなくなり、また警報の頻発によりカ倫内の数十万回民たちの心を安んじるのが困難になることを恐れる。もし〔サリコルを〕早急に奪い返さなければ、匪賊がさらに結託して勢力を増し、滅ぼすことが難しくなり、特に辺境に重大な影響があります。（奕山たちの上奏文「奏聞葉爾羌所属卡外色呼庫勒地方被賊占據情形並会同籌画辦理緣由事」、道光 17 年 1 月 16 日）¹⁴

【史料 1】によれば、奕山は上奏文の中で、清朝が天山の南北両路を統一した後、サリコルをその管轄範囲に置き、ベク制を用いて支配していることを強調したことが見られる。また、奕山はサリコルが新疆の経済に貢献している点にも言及した。新疆で相次ぐ侵入事件が発生する中、新疆統治体制の弱体化に伴い、財政難が重要な問題となった。そのため、奕山はサリコルの税収の現状を強調し、当該地域が新疆の発展において重要な役割を果たしたことを示した。【史料 1】において、奕山が道

⁹ 台湾国立故宮博物院所蔵、宮中档奏摺（道光朝）「奏聞葉爾羌所属卡外色呼庫勒地方被賊占據情形並会同籌画辦理緣由事」（奕山、興徳、関福）道光 17 年 1 月 16 日、档案番号: 405000339

¹⁰ 同上。

¹¹ 同上。

¹² 同上。

¹³ テュルク系ムスリムを指す語である。漢文の史料で「回人」、「回衆」なども記入されている。

¹⁴ 台湾国立故宮博物院所蔵、宮中档奏摺（道光朝）「奏聞葉爾羌所属卡外色呼庫勒地方被賊占據情形並会同籌画辦理緣由事」（奕山、興徳、関福）道光 17 年 1 月 16 日、档案番号: 405000339

光帝の「卡倫を守備し、さらに卡倫に出て作戦を行ってはいけない」という命令に疑問を呈した。それに加えて、奕山はコーカンド軍のサリコルへの侵入事件を速やかに解決する必要があることを訴えた。【史料 2】によれば、道光帝がサリコルのムスリムが自発的にコーカンド軍の侵入に抵抗することを期待していたが、奕山は新疆の経済発展の観点から、これが新疆の税収に与える影響を分析したことが見られる。したがって、奕山はコーカンド軍の侵入問題に対し、有効な軍事的手段を講じるべきであると考えた。前述のように、奕山は道光帝の命令に従い、ヤルカンドに到着した後、コーカンドに書簡を送り続けた。しかし、コーカンド側の態度が不明であることを踏まえ、奕山たちは道光帝に対して以下の提案をした。

【史料 3】当該の夷人（コーカンド人を指す）が降伏するかどうかは予測が難しく、奴才らが共同で議論した結果、もしコーカンドベクが罪を悔い改めて誠意を示すのであれば、まさに勅旨に従い、状況に応じて適切に処理するべきです。もし当該の夷人が頑迷で悟らず、聞かないふりをし、あるいは返事がきても、それでも強情にも従わなければ、サリコルの地を取り戻す日はついに来ないだろう。（奕山たちの上奏文「奏聞葉爾羌所属卡外色呼庫勒地方被賊占據情形並会同籌画辦理緣由事」、道光 17 年 1 月 16 日）¹⁵

清朝側は書簡を通じた交渉によってコーカンドを屈服させ、撤退させることを意図していたものの、コーカンドの君主が侵入事件を直接対応できるかどうか、またどのような態度を取るのかは不明であった。それを踏まえて、奕山は必要に応じてコーカンドに対して軍事行動を起こし、サリコルの安定を図るべきであると考えた。上述の【史料 3】の中に示されていたように、道光帝の消極的な解決策に対して、奕山は上奏文の中で婉曲的にサリコルへの出兵を提案した。

しかし、奕山が卡倫を出てコーカンド軍の侵入を迎撃する指示を下そうとしたものの、道光帝は依然として清軍の防衛線を卡倫内に維持するよう指示した¹⁶。また、道光帝はサリコルを支援してコーカンド軍との戦いに乗り出すことを望まず、現地のムスリムに自らの土地を自衛させるよう指示した。こうして、奕山は道光帝の命令に従わざるを得ず、コーカンド軍を迎撃する任務を現地ムスリムに託した。

事件の結果が奕山の予想通りであり、彼がコーカンド側と直接交渉する機会を得ることはなかった。道光 17 年 2 月 24 日（1837 年 3 月 30 日）、奕山はコーカンド・ハーン国の邁木特（マイムト）、伊瑪木尼孜爾（イマムニズル）がフタイダに送った書簡を受け取った（陳 2020:62）。その中で、コーカンド側は奕山が送った書簡を、ハーキム・ベクが偽装したものと疑い、その書簡を送り返した。奕山は、コーカンド側が詭弁を弄していると考えたものの、サリコルにおける侵入事件に対する軍事的な解決策が見出せなかったため、再びその書簡への返事を書くほかなかった（陳 2020:65）。その後、奕山はさ

¹⁵ 同上。

¹⁶ 『宣宗実録』巻 294、道光 17 年 2 月 21 日

らに 2 通の書簡を送ったが、コーカンド側はやはり全く応答せず、清朝側の書簡を無視した（陳 2020：62）¹⁷。

5.2 侵入事件の解決

道光 17（1837）年の夏に事態は一変した。コーカンドからサリコルの家族を訪ねていたムスリム吐爾阿沙（ツルアサ）が密かに回莊の人々と連絡を取り、阿達那（アダナ）を含む 8 人のコーカンド頭目を捕らえてヤルカンドに護送した（陳 2020:63）。奕山は、これらのコーカンド人が何度も辺境に侵入し、回莊を乱して、ムスリムに圧制を加えたのを理由として、阿達那と共犯者を死刑に処した¹⁸。奕山の強硬手段はサリコルの危機を解決し、周辺の現地ムスリムの民心を安定させ、新疆の辺境問題は一時的に緩和した。しかし、奕山の行動は道光帝の叱責を招いた。道光帝は、ラシュカル・コシュベギの部下である阿達那らがムスリムに捕らえられ、奕山によって処刑されたことがコーカンドの復讐の口実となり、軍事衝突を引き起し、辺境の安定を脅かすことになることを懸念していた¹⁹。コーカンドと清朝の間で戦争が勃発すれば、清朝は多くの軍事的・財政的資源を費やすことになる。道光 17 年 7 月 3 日（1837 年 8 月 4 日）の上諭²⁰で、道光帝は、ムスリムが阿達那を捕らえた行為は私怨を晴らすためのものであったと述べていた。また、道光帝はカ倫内に避難しているムスリムを故郷に戻らせ、コーカンド・ハーン国の侵入に対する防備を回復するよう命じた。

しかし、奕山の強硬な対応策は確実によい効果をもたらした。道光 17 年（1837 年）の夏には、コーカンドの君主はヤルカンドに使者を派遣して書簡を清朝側に渡した²¹。この書簡では、コーカンド人が清朝のカ倫内に入って騒乱を起こさないことを保証する旨が述べられている。これによって、コーカンド軍によるサリコルへの侵入事件は完全に解決した。実際には、1830 年代末にコーカンド・ハーン国はブハラ・アミール国の軍事的圧力を受けるとともに、国内が混乱状態にあったため、清軍に対抗する軍事力を持っていなかったようである（潘 1991:152; 潘 2006:109）。

以上のように、奕山の上奏文から見ると、彼はサリコルの侵入事件に対して強硬な手段を取ることを主張したことがわかる。奕山の提案は道光帝に認められなかったが、彼は阿達那らに対する処罰を通じて、コーカンド・ハーン国に対し清朝の強硬な姿勢を示す機会をつかみ、独自に判断を下して侵入

¹⁷ 陳（2020:65）は「奕山奏為拿獲色呼庫勒滋事賊目阿達那審明先行正法並迭次曉諭浩罕伯克事」（道光 17 年 5 月 26 日）（中国第一歴史檔案館所蔵、檔案番号:03-4056-016）を参照した。台湾の国立故宮博物院図書文献館所蔵の同檔案（檔案番号:405000994）が破壊され、部分の内容を読めない。

¹⁸ 台湾の国立故宮博物院図書文献館所蔵の「奕山奏為拿獲色呼庫勒滋事賊目阿達那審明先行正法並迭次曉諭浩罕伯克事」（檔案番号: 405000994）の中に吐爾阿沙が阿達那を捕まえた理由と過程、および清朝側による認定された阿達那の犯罪行為が記載されたが、史料の原本が破壊されたため、具体的な審理過程が不明である。

¹⁹ 『宣宗実録』巻 298、道光 17 年 6 月 28 日条。

²⁰ 『宣宗実録』巻 299、道光 17 年 7 月 3 日条。

²¹ 『宣宗実録』巻 301、道光 17 年 9 月 5 日条。

事件を解決した。その後、コーカンド軍が再びサリコルで騒乱を引き起こすことはなく、コーカンド国の東方貿易の独占という考えも、清朝の強硬姿勢や本国の国力の衰えによって一時的に棚上げされた。

6. 結論

清朝側がコーカンドによるサリコルへの侵入に対抗するために取った対策を見ていくと、道光帝と伊犁参贊大臣である奕山は、対コーカンド政策について異なる見方を持っていたことが明らかになった。

道光帝は防備の強化と卡倫の厳重な守備を強調し、コーカンド人が卡倫内に侵入するかどうかを清朝軍の出兵の判断基準とし、清朝軍を卡倫の外に出兵させることを禁じた。また、道光帝はコーカンド人のサリコルへの侵入がコーカンド・ハーン国の君主の意図に反するものであると考えていた。そのため、道光帝は交渉を通じてコーカンドに清朝への恭順を示すよう求めるとともに、コーカンド側がサリコルへの侵入者を自ら処罰すること期待していた。奕山と道光帝の交渉過程を見ると、奕山は道光帝の対策を経済的および政治的な観点から分析し、この事件への対応方法を模索したことがわかる。奕山は新疆の経済発展に与えた影響について考察し、現地のムスリムがコーカンド人の侵入を強硬に抵抗すれば、耕作が遅れ、その結果として清朝への納税に悪影響を及ぼす可能性があったことを指摘している。また、政治的な面では、コーカンド・ハーン国が勢力を拡大すると、清朝の国境地域に不安定化をもたらすことができると考えていた。したがって、奕山は積極的に兵を出してサリコルにおける不安要素を解消すべきであると主張し、道光帝の非積極的な専守方策を改めたいと考えていた。道光帝とは異なり、奕山は交渉によってコーカンド・ハーン国の君主が事件の解決に協力することは期待できないと主張していた。

サリコルのムスリムによるコーカンド軍への抵抗を理由として、清朝はカシュガリアにおける防備を「卡倫内地域」に重点を置き、「卡外界内地域」²²には出兵せず、そこは主にハーキム・ベクの指揮と現地ムスリムの動員に依拠して自衛させたことが見て取れる。コーカンド軍の侵入事件中に新疆当局は、あくまで現地ムスリムの自衛策を後方から支援する役割にとどまっていたと言える。しかし、清朝側の指揮官であった奕山はサリコルの安定を守る責任を負い、ムスリムが要求する難民の収容を許可しただけでなく、道光帝への上奏を経ずに阿達那らを処刑し、侵入事件を解決した。奕山たちは、清朝の朝廷の方針に従って清軍を「卡倫内地域」に専守させ、「卡外界内地域」に出兵しなかったが、「卡倫内地域」における犯罪の審理や裁判を厳格化することで、「卡外界内地域」への影響力を維持しようとしていたことが見て取れる。

参考文献

史料

「宮中档奏摺」台湾国立博物院所蔵。

²² 清朝は卡倫を設置した後、卡倫の外側（卡外）に広がる「辺界」の一带を自領域と見なしていた（小沼 2014:198）。小沼（2014:199）はこの地域を「卡外界内地域」と呼んでいる。

『清実録（宣宗実録）（文宗実録）』中華書局、1986 年.

二次史料

漢文：

陳剣平（2020）「道光年間浩罕対色呼庫勒的侵略及清廷的对策」『中国边疆史地研究』30（4）:57-67.

潘志平（1991）『中亞浩罕国与清代新疆』中国社会科学出版社.

——（2006）『浩罕国与西域政治』新疆人民出版社.

和文：

小沼孝博・新免康・河原弥生（2013）「国立故宮博物院所蔵 1848 年コーカンド文書再考」『東北学院大学論集.歴史と文化』49:1-24.

小沼孝博（2014）『清と中央アジア草原—遊牧民の世界から帝国の辺境へ—』東京:東京大学出版会.

佐口透（1963）『18-19 世紀東トルキスタン社会史研究』吉川弘文館.

堀直（2022）『清代回疆社会経済史研究』大阪大学出版社.

